田辺市立美術館へのきもち㉝

1990年代の10年間はヨット競技に熱中していた。毎週土日の2日間は50馬力のゴムボートを走らせていた。何をするかといえば、マークブイを海面に打ち、笛を吹いてタッキング、ジャイビングをさせる。日本代表チームのコーチをしていたから、海外のレースで勝てる選手を作るために、練習方法を考え、ホワイトボードに図をかき、それっと出艇する。まことに楽しかった。

クロアチア・スプリットのアドリア海で開かれたＥＵ選手権（1998年8月1日～ 8日）では、ドイツ・フランクフルトで乗り換える時、時間を利用して選手８名と一緒に市内の美術館に入った。そこではＥＵの写真アーティスト展をしていて、なぜかアラーキー・荒木経惟の写真もあった。グロテスクだった。

美術館に入ると横長の階段があり、その先にまた階段があって上に行こうとしたときだった。柱の陰から正装した老人が現れ、ニコニコしながら何度もおじぎをしているように見えた。手は鶴の首のようにまげてどこかを指している。笑顔でジッと私達をみながら声を出すことなくその動作をくりかえす。指の先を見ると横長の階段の奥の方にチケット売場があった。あそこへ行ってチケットを買うんですよと、その人は言っていたのだ。

日本でならば、両手をひろげて私達を止め、声を出して注意するはずなのに、その美術館では、ひと言も発せず、笑顔と身体の動きだけで示していた。そのおだやかな老人の笑顔が印象的だった。

トルコ・イスタンブール西方・シリウリで開かれたＥＵ選手権（1994年7月23日～ 30日）では、リゾートホテルが各国選手団の宿泊地になった。ギリシアのエーゲ海にも近いリゾート地ゆえ、選手のファミリーもたくさん来ていた。

２００艇あまりのヨットを並べた海岸の上方にはホテルのプールがあり、白いリクライニングベッドが並んでいた。それを動かそうとすると、どこからともなくボーイさんが現れ、マットをすぐにお持ちしますと、いってくれる。夏のリゾートを楽しむファミリーは、本を読みビールを置いて、女性はトップレスで寝そべっていた。心ゆくまで楽しんでいるようすは、見事というほかなかった。

レースの2日目は強風でレース運営に不手際があった。海上のコーチボートにいると、デンマークのコーチボートがやってきて、審問を要求するために新しい証拠を見つけようと思うのだが日本も参加しないかと、誘いがあった。レース後、審問要求国はホテルのロビーに集まった。顔ぶれは、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、アイルランドと日本だった。若いノルウェーのコーチの手には、すでにレース委員会からもらってきた第３マークの回航順位のコピーがあった。そこには３４艇のセールナンバーが記録されていた。審問の上で新しい証拠になる資料であった。ロビーの別のテーブルでは、IJメンバー数名がトルコの茶「チャイ」を飲みながら談笑していた。IJとは国際審判員で、すべての問題を法則にもとづいて判定する。IJの姿を見たデンマークのコーチは、ちょっと話してくるといって席を立った。数分で戻ってきて皆に説明していうには、「審問の要求をするためにレース委員会に資料の提示を求めようと思うが、この行動についてどう思うかと、IJに打診してみたところ、IJたちはそれは問題ないよといった」という。だからこのコピーは問題なく新証拠となるという。私は彼の周到で誠実な態度を見て、ＥＵコーチのヨット競技に対する意識の高さに驚いた。

やや遅れてイギリスのコーチが来たのを見た若いコーチたちは、彼の周りに集まり意見を求めた、すると彼は「イギリス人にはチャイ（ティー）さ」と冗談をいいながら横取りすると、持ってきたバインダーを置いて、審問請求のための文案をさらさらと書き始めた。全員がそれをのぞき込みながら「イエス」「ザッツライト」と相づちを打っていく。まさに国際会議だった。

私が是非ともこの目で見たい絵はムンクの「叫び」だった。ダ・ヴィンチの「モナ・リザ」でもなく、モジリアニの長い首の女性でもない。世界選手権がフィンランド・マリエハムで開かれたとき（1995年8月5日～ 17日）その機会がおとずれた。日本代表選手５名のファミリーには航空界に顔がきく人がいて、スカンジナビア航空の割引チケットとロゴ入りＴシャツの提供をうけ、さらにノルウエー・オスロの安いホテルの紹介をうけた。オスロでは同行してくれている支援者にお願いして単独行動をとった。オスロにあるムンク美術館が目的だった。ホテルで交通手段と駅の名前を教えてもらい、路面電車に乗った。坂道もカーブも多い軌道で、窓から見える人の姿や家の形が新鮮だった。

ムンク美術館にはたくさんの「叫び」が展示されていた。有名な「叫び」しか知らなかった私には驚きだった。もっと驚いたのは、絵が小さいことだった。さらに驚いたのは、原画が階段の壁にかかっていて、階段で一休みしながら存分に見ることができたことだった。しかも原画を手で触ってみることもできるほどだった。「叫び」の前で何分間いただろう。うねりの一本一本、色の不快さ、顔の不気味さをなめるように見た。このとき私は自分自身の不安と恐怖に押しつぶされて、叫びだしていた。

はてさて、中国文学の研究を専門にしていて美術には門外漢の私のムンクへの鑑賞はこれでまともなのだろうか。展示を見るたび必ず感動させられる、田辺市立美術館の専門家のご批評を仰ぎたい。

（福山大学名誉教授　久保　卓哉）

昨年、有田のみかん山にて

改修工事が始まりました

今回の田辺市立美術館（本館）の改修工事は、設備棟内の空調機を始めとする機器を一新するもので、来年9月末頃までの休館を予定しています。

まずは現在の設備を停止して取り出せるように、収蔵庫で保管している作品を、熊野古道なかへち美術館（分館）へ移動することから準備が始まりました。通常は展示室として使用している分館のスペースを、一時的に収蔵庫とするため、棚を設置したり、空調機の効率を上げ、虫等の侵入を防ぐために密閉度を高めたりといった処置をして、室内のコンディションをチェックした上で、移動を開始しました。およそ３週間にわたって、点検・梱包－搬送－開梱・点検・配置の作業を繰り返し、すべての作品を無事に移し終えています。

９月からは工事に関わる人が集合して、手順や具体的な機器の取り外し、新しい設備の取り付けの日程、その間の事務所機能を維持するための仮設工事等について協議、検討する会議も行われています。

長期間ご不便をおかけしますが、安全に抜かりない工事を完了するためですので、何卒引き続き皆様のご理解をお願いいたします。

（学芸員　三谷　渉）

関係者がそろって工事の日程等について協議しました　2025年9月1日

田辺市立美術館 NEWS　ORANGE Vol.43
編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和７年10月１日

田辺市立美術館
〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

編集後記

６月から本館の空調機等を入れ換える大規模な改修工事に伴って、本館・分館とも長期の休館に入っています。本館は平成８年の開館から、来年で３０周年を迎えます。自宅のテレビや冷蔵庫と同じで、長年の使用により限界を迎えているものが続々と出ていましたので、この機会にしっかりメンテナンスを行いたいと思います。この間も美術館の活動は続いていますので、このORANGEでお伝えできればと思っています。（F.O.）

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.43

小清水漸《クーフリンの小舟》　1997（平成9）年　　熊野古道なかへち美術館　裏庭

作品紹介　小清水漸《クーフリンの小舟》

「もの派」と呼ばれる１９６０年代後半から７０年代にかけて勃興した日本の前衛芸術運動、木や石、鉄といった素材そのものが人に働きかける力や、それら素材間の関係を表現の根元とする制作の、代表的な作家の一人である小清水漸（１９４４～　）の作品、《クーフリンの小舟》３点が熊野古道なかへち美術館の裏庭に設置されている。

これらの作品は当初、東京都千代田区の新幸橋ビルディングに付帯するアートワークとして、同地のランドスケープを成していた。このアートワークは、アイルランドの詩人、W.B. イエイツ（１８６５～１９３９）が日本の能に触発されて書いた戯曲「鷹の井戸」をテーマにしたもので、《鷹の井戸》、《地の棘石の華》と４点の《クーフリンの小舟》の配置によって構成されていた。しかし、同地の再開発にともなってこれらの作品が撤去されることになり、２０１４（平成２６）年に当市に移設された。

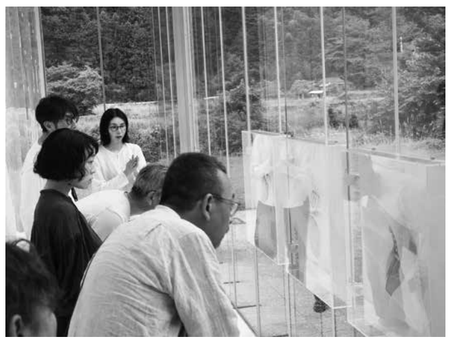
《鷹の井戸》は元の場所に残され、《地の棘石の華》と《クーフリンの小舟》１点が田辺市立美術館の位置する新庄総合公園に、そして《クーフリンの小舟》３点は熊野古道なかへち美術館裏庭へと動いたが、個々に力をもっていた作品は、またそれぞれの場で接する人々の心に新たな物語を紡ぎ続けている。

（学芸員　三谷　渉）

REPORT　特別展「河野愛　灯台へ、」アーティストトーク

布、陶やガラス、収集した骨董、写真などを複合的に用いながら、場所や人の記憶、時間をテーマにしたインスタレーションを発表し続けている河野愛（１９８０～　）の近作を紹介する特別展「河野愛　灯台へ、」を、田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館、二つの美術館を会場にして４月から６月にかけて開催しました。会期中の５月２４日（土）には河野愛さんをお招きして、それぞれの会場で自身の作品や制作について語っていただくアーティストトークを行いました。

午前は、河野さんの祖父母が営んでいた白浜のホテルのネオンサインの一部を用いた〈I〉シリーズを展示した田辺市立美術館でトークを開催しました。ネオンサインがホテルの屋上から外されてその一部を持ち帰ったエピソードや、そのネオン管を積み上げて作品にしたきっかけ、展示室の床が作品の光を反映して波に揺れる夜の海のように見える特性に合わせて展示がなされたことなど、様々なことが語られました。また河野さんの説明を聞きながら、白浜の桟橋に立てられた〈I〉を撮影した映像作品《〈I〉opportunity》を、トークの参加者とともに鑑賞した時間は、映される情景のゆっくりとした変化にともなって、参加者それぞれの時間が重なり合ってゆくような一時でもありました。



熊野古道なかへち美術館では展示室以外に、交流スペースや回廊にも作品を展示しました。写真は回廊で展示した新作、《pearl embroidery》について説明する河野愛さんと参加者です。　2025年5月24日

午後からは、異物や異者を示す古語から名づけられた〈こともの〉シリーズを主に展示した熊野古道なかへち美術館でトークを行いました。自身の体内から生まれ出た存在でありながら、異者のように感じたという自身の子どもの話や、コロナ禍の鬱々とした状況下で遊び心から幼子の肌のくぼみにおもちゃを挟み込んでみたこと、母としての視点を他の人と共有するしくみができないかと思ったことなど、河野さんの考えていることが丁寧に語られました。

個人的な記憶や時間だけではない、鑑賞者も含めた他者や土地の記憶とも複層的に繋がる河野さんの作品群を、各会場のそれぞれのトークを通じて、より体感していただく機会になったのではないかと思います。参加者からは質問も多くあがり、そのやりとりもまた、作品や河野さんの思考について知り、親しんでいただくことにつながっていたと思います。

（学芸員　知野　季里穂）

REPORT　特別展「生誕１２０年　村井正誠　－画家にして版画家－」

日本の近代美術に抽象絵画の領域を切り開いた重要な画家の一人である、村井正誠（１９０５～９９）の画業を振り返る特別展を、生誕１２０年にあたる今年の４月から６月にかけて、田辺市立美術館の展示室３・４・５を会場にして開催しました。

長年に亘って村井の研究と作品の収集を重ねてきた、和歌山県立近代美術館の特別な協力によって、多数の作品を貸与いただき、当館が収蔵する作品と合わせて、油彩画等１６点、版画１９点、計３５点による展覧会の構成とすることができました。

展示室３では、若き日のフランス留学中に試みていた斬新な構図の作品から、帰国後本格的に抽象表現に取り組み、探求を重ねて発表された、幾何学的な構成の作品を主に紹介しました。続く展示室４では、戦後に展開した村井の最も個性的な、色面と人の姿などを組み合わせたユニークで情感に満ちた抽象表現の作品を展観しました。そして最後の展示室５において、村井が画家としての歩みの初期から取り組み、生涯に亘って継続された版画の制作を特集しました。この版画作品における色彩と造形の試みは、油彩画における表現とも結び付いたもので、その双方をうかがうことが、村井の芸術を理解するためには不可欠だと考えたからです。村井自身も「私の制作、その中には確かに２本の線があり、油彩と版画です。いうまでもなく、版画は油彩で表現できないものを出すための手段であり、油彩は版画の出し切れぬものを出す、材料と見せ方にあると思います。」と述べているように、画家にして版画家という、村井が築いた芸術家の姿を伝えることは、今回の展覧会の主眼としていたものでした。

和歌山県立近代美術館の植野比佐見さんによる講演会では、主要な作品の分析や制作の歩みについて解説が行われ、村井正誠の芸術家としての生涯について詳細にうかがうことができました。　2025年5月17日

会期中には、展示解説会を行うとともに、継続して村井正誠作品の調査・研究に携わってこられている、和歌山県立近代美術館主任学芸員の植野比佐見さんをお招きして「村井正誠と版画」と題した講演会も開催しました。これらのことが、生誕１２０年の機会に、村井正誠が残した作品を改めて深く鑑賞していただくことにつなげられていましたら何よりです。また今年９月から１１月にかけては、和歌山県立近代美術館においても「生誕１２０年　村井正誠展　色のやどり・形のうぶすな」が開催されます。合わせてご覧いただけることを期待しています。

（学芸員　三谷　渉）

BOOK GUIDE　ヴァージニア・ウルフ『灯台へ』鴻巣友季子 訳／新潮文庫

「灯台」は、元来安全な航海のための目印となるものですが、同時にその土地の時間や記憶の重なりを感じさせるものでもあり、往々にしてその土地のシンボルとも言える存在となっています。４月から６月にかけて田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館で開催した、河野愛の近作を紹介する特別展は、「灯台」を記憶や時間の標識として河野の作品を象徴的に表す言葉とし、展覧会のタイトルを「灯台へ、」としました。

一方でこの「灯台へ、」というタイトルから、イギリス近代の小説家、ヴァージニア・ウルフの長編「灯台へ」を連想された方がいたかもしれません。この小説について、ここで簡単にご紹介しておきたいと思います。

哲学者ラムジーの一家が過ごすスコットランドの小さな島の別荘での出来事が書かれるこの小説は、灯台へ行きたがる一家の幼い息子に、ラムジー夫人が「いいですとも。あした晴れるようならね」と約束するところから始まります。この別荘にはラムジー一家の他にも、駆け出しの研究者タンズリーや画家の卵のリリー、植物学者のバンクスらが集まっていました。その後、第一次世界大戦をはさんで１０年の月日が経ち、この間にラムジー夫人や子ども２人が亡くなります。再び別荘に集まった人々は、１０年前に行くことができなかった灯台へ向かおうとします。

近代の西洋文学に成立した、登場人物の思考がそのままに描かれる「意識の流れ」という手法がこの小説には用いられています。例えば、以下は登場人物が一堂にそろった晩餐会の一場面です。

「灯台守はどれくらい、むこうに留まることになるんですか？」
リリーは質問した。タンズリーは呆れるほど詳しかった。さて、彼もリリーに感謝して好意をもったようだし、お喋りも楽しみだしたようだし、とラムジー夫人は考えた。

この文章の前にもリリーの思考が書かれていて、その彼女がタンズリーに質問したかと思えば、次にはラムジー夫人の思考がと、個性的な登場人物の意識が、流れるように次々と変わって描写されてゆきます。それによって、登場人物それぞれの目線を体感できるのがこの小説の魅力の一つです。

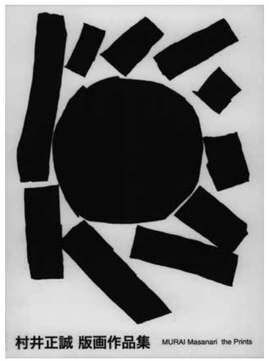
「河野愛　灯台へ、」展で展観した河野の作品には、誰かの記憶や時間を孕んだ物が用いられていました。作品を通して、ある個人の記憶や時間だったものが、個を越えた広がりをもって鑑賞者の意識へも積み重なってゆく……。展覧会ではそのような体験をしていただけたのではないかと思っています。そのことは、先に述べたウルフが『灯台へ』において登場人物の内面を多層的に描いたことと何か通じるものを感じませんか。

展覧会は終わってしまいましたが、記録集を刊行しますので、また手に取って展覧会に思いを馳せていただけたらと思います。そのときに、ウルフの『灯台へ』のことを少し意識の片隅において。

（学芸員　知野　季里穂）

BOOK GUIDE　『村井正誠　版画作品集』　阿部出版

村井正誠の作品集としては、村井が８５歳のときに用美社から出版された『村井正誠画集』を、最もまとまった創作活動の全体を見通すことのできるものとして挙げることができます。「私の絵画は、すべて人間的なものから出発している。対象が人間であること、また人間とのつながりにおいて事象を見るということが、私の場合大切な要素である。」に始まる巻頭言をはじめ、要所に挿入される村井の言葉も含蓄深いもので、作家存命中の編集、刊行ならではと思われる内容となっています。装丁も村井自身によるもので、そのため高価な画集ながら求めて愛蔵される方も多く、残念ながら今では入手難になっています。



画集の刊行後、村井は１９９９（平成１１）年に満９３歳で逝去しましたが、それから２５年が経過し、生誕１２０年を前にした昨年、阿部出版から新たに『村井正誠　版画作品集』が刊行されました。画業を通して制作された版画の中から、主要な作品２２８点のカラー図版が限定部数や技法を含めたデータとともに収録されています。他に参考作品や版、画材もカラー写真で紹介されていて、村井の版画制作を余すところなくうかがうことができます。また資料としても、雑誌『版画芸術』９４号（阿部出版）に掲載された、村井９１歳のときのインタビュー記事の再録の他、和歌山県立近代美術館主任学芸員の植野比佐見さん、世田谷美術館館長の橋本善八さんによる版画作品についての書き下ろしの論考に加え、最晩年の村井を支え、没後村井の自宅兼アトリエだった建物を改装して、生誕１００年の年に開館した村井正誠記念美術館の館長を現在まで務めている村井伊津子さんの回想も収められていて、たいへん充実しています。巻末の略年譜や主要な文献のリストも、これまでの研究の蓄積が反映された最新のもので、村井に関する事項や文献をたどってゆくときに、とても有用なものです。

載せられた村井伊津子さんの回想の中に「その一見冗舌に見える村井の絵画作品は、その多くが彼の試行錯誤の末にたどりついた彼独自の絵画表現であり、さらにいえば多くの版画作品はその研究作品であったと村井から聞いている。」とあるように、村井の版画作品をよく見てゆくことは、その表現一体についての理解と鑑賞を深めるための確かな手掛かりになるものと思います。もちろん一点一点の版画作品もたいへんユニークなものですし、この作品集によって、いつでもそれらを手元で楽しめるということは、贅沢なことに感じます。

この本をガイドブックのようにして、改めて実際の村井正誠の作品に向き合うと、また新たな魅力に気づかされることもあるかと思います。私がそうでした。

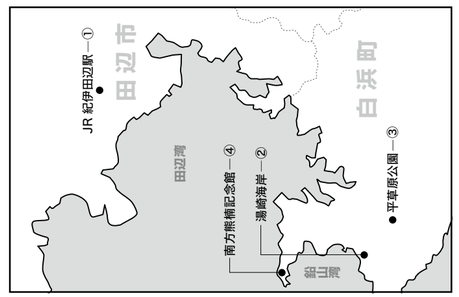
（学芸員　三谷　渉）

続・美術館の外に

ちょうど１０年前、当館が開館２０周年を迎えるにあたっての改修工事を行うため、およそ半年間の休館に入るときに刊行した〔ORANGE〕第２３号の折込みに、「美術館の外に」と題した特集記事を掲載しました。休館中にも、身近で魅力的な美術作品に接する機会をつくっていただきたいと企画したもので、田辺市内にある５点の野外に設置されている作品を取り上げました。今回は、空調機を一新するなど前回以上の大規模な改修工事を行うため、一年以上の休館となりますが、この機会に、その続編として隣町の白浜町にもエリアを広げて４点の彫刻作品を紹介したいと思います。

まず、田辺市、白浜町とも、地域の顔ともいうべき場所に、その地の伝承に基づくシンボリックな彫刻が建てられていることに注目してみます。

田辺市の玄関口となっている、ＪＲ紀伊田辺駅の駅前広場の中央には、米治－（１８９６～１９８５）による《弁慶像》（１９７１年）があります①。源義経に最後まで付き従った怪力の僧兵、弁慶が当地の生まれであるという言い伝えは、市民に長く親しまれてきており、田辺市を外に向かって「弁慶誕生の地」としてアピールしようとする気運は１９６０年代の後半頃から高まっていました。１９７１（昭和４６）年に和歌山県で開催された黒潮国体に合わせて整備された駅前広場に、田辺市、同市観光協会が個人の寄付を得て《弁慶像》を据えることになったことには、そうした背景があります。制作は各地のモニュメンタルな彫像を手掛けていた、高岡の米に多嘱され、試作と協議を経て、現在の薙刀をかまえた勇壮な姿の《弁慶像》が完成しました。



白浜町の代表的な観光スポットである、鉛山湾に面した白良浜の海水浴場から少し南に下った、古くからの温泉宿が並ぶ湯崎海岸には、日高正法（１９１５～２００６）の《真白良媛像》（１９６３年）が建っています②。白浜温泉を訪れた有閑皇子が、帰りの途で謀反の罪によって処刑されたことを知らず、皇子に思いを寄せながら再訪を待ち続けたという真白良媛の伝説に拠った作品で、左肩に白浜特産の白い貝、ホンカクジヒガイを抱いた女性の姿で表されています。ヨーロッパ旅行で目にした公園などにある彫刻に感じた当地のホテル経営者が、１９６３（昭和３８）年に私財を投じて、知己だった大阪の彫刻家、日高に制作を依頼し、完成したばかりの海岸沿いの遊歩広場に寄進したものです。

田辺市の歴史上のヒーローを精悍に表した彫刻と、白浜町の文学的なヒロインの優美な像は、好対照に見えます。この二つの彫刻は、それぞれの作品が醸かれた景観や、その地の由緒とも併せて楽しむことのできる特徴的なものだと思います。

白浜町を巡ると、日本近代の彫刻史に名刻む二人の作家の肖像作品を鑑賞することができます。鉛山湾を見下ろす名所の一つである平草原公園の入り口にある、紀州博物館（現在休館中）前の、朝倉文夫（１８８３～１９６４）による《宮城道雄先生像》（１９６２年）③と、鉛山湾、田辺湾の双方を見はらす番所山公園内の南方熊楠記念館にある保田龍門（１８９１～１９６５）の《南方熊楠之像》（１９６５年）④です。ともに委嘱を受けて、同時代の箏曲家と博物学者の肖像に取り組んだ晩年の彫刻家が遺した作品は、一つの時代をうかがうものとしても鑑賞しうるものです。

ここにお伝えした美術館の外の彫刻を、その作品がその場所にある経緯についても聞いを馳ねていただけたらと思います。美術鑑賞に留まらない様々なことが、心に湧き起こってくる体験につながることを期待しています。

（学芸員　三谷　渉）